

国立

国会

図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2022.5



大公開！ 国立国会図書館での資料のデジタル化事業

資料の世界の歩き方 写真を読む 第4回

新聞写真の歴史と背景

国立国会図書館で働いています Season2

国立国会図書館 月報

NO. 733
MAY 2022

CONTENTS

1 *Tales of mystery and imagination*

— 神秘と幻想の物語

今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から

16 館内スコープ

『デジタル化への旅支度』

31 本屋にない本

『東北方言オノマトペ（擬音語・擬態語）用例集』

6 大公開！

国立国会図書館での資料のデジタル化事業

36 NDL TOPICS

17 資料の世界の歩き方 写真を読む

第4回 新聞写真の歴史と背景

32 国立国会図書館で働いています Season2 no.8



表紙：『港都情景（アオイ書房十週年記念
書窓版画帖十連聚 2）』から
川西英 著 アオイ書房 昭和 16 27cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1069108/10>（モノクロ画像）

Tales of mystery and imagination —神秘と幻想の物語—

井田 敦彦



"Ligeia" (リジリア) より。ポーの小説とクラークの挿絵は、「作家と挿絵画家の理想的な出会い」の好例とも言われている¹⁾。

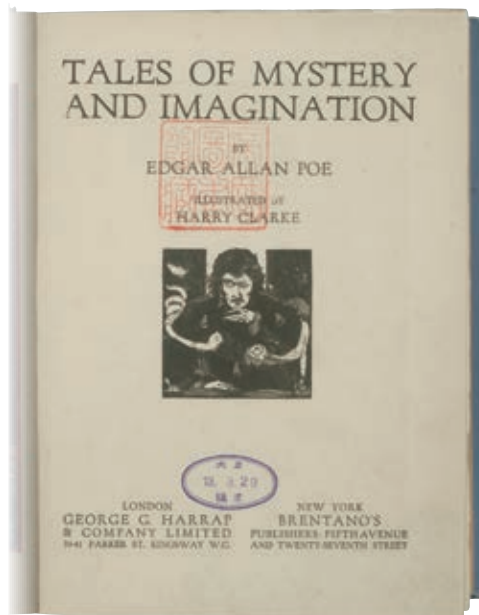
Tales of mystery and imagination

by Edgar Allan Poe ; illustrated by Harry Clarke,
London : G. G. Harrap, New York : Brentano's,
[1923?] 381 p., [31] leaves of plates : ill. (some
col.) ; 28 cm <請求記号 236-37>

本書は米国の作家エドガー・アラン・ポー（1809・1849）の短編小説集で、アイルランドのステンドグラス作家、挿絵画家のハリ・クラーク（1889・1931）の挿絵が付されています。ロンドンのジョージ・G・ハラップ社から1919年に初版が、1923年に第2版が出版されました²⁾。

20世紀初頭の英国では、印刷技術の進歩と購買者層の拡大を背景に、贈答本や応接間本とも呼ばれる大型挿絵本の出版ブームが起ります。挿絵本の黄金時代と称されるこのブームは、第一次世界大戦で終わったと言われますが、本書はブームにやや遅れて出版されたものの顕著な売れ行きを示し、クラークの名はロンドンでも知られるようになります。その挿絵はゴシック的な暗さと幻想性を特徴とし、超自然的な存在や内面の観念を暗示するような、不思議なリアリティを感じさせます。クラークは1914年の3月頃にポーの短編小説集を読み、その挿絵を描きたいと思うようになったといえます³⁾。

本書には、「黄金虫」「黒猫」「アッシャー家の崩壊」「モルグ街の殺人」といった代表作を含むポーの29の短編が収録されています。ポーの怪奇小説、探偵小説は児童書として刊行されているものも多く、その内容は広く知られていますが、一般にはあまり馴染み



標題紙。帝国図書館の蔵書印と「大正13.3.29購求」(1924年購入)の印がある。なお、注(2)(3)によれば出版社はロンドンのハラップだが、ニューヨークのブレントナーの名前もある。海賊版も含め、米国でも広く読まれていたらしい⁴。



"Silence" (沈黙) より。キャプションには「その広大無辺の荒野にはいかなる物音もなかった」とある。

「俺の話を開け」と言つて物語つた形式をと
り、神話的な光景、すなわち、リビア^⑤の荒涼
たる地域、ザイル河のほとり、病的なサフ
ラン色の河の水、太陽の赤い眼、河床に群生
する蒼白い巨大な睡蓮、霧の中を昇る深紅の
月、神の相貌を持つ岩上の男といった光景が
語られます。悪霊が騒乱の呪いをかけると、
嵐と洪水、雷鳴と稲妻が起こりますが、男は
岩上に座つたままでした。しかし、悪霊が沈
黙の呪いをかけると、万物が静止し音が消え、
男の顔は恐怖のために青ざめます。挿絵の
キャプションにあるように、「その広大無辺
の荒野にはいかなる物音もなかった」。男は
遠くへ逃げ出して、再び帰つてきませんでした。
悪霊はこの話をして笑いましたが、「私」
は笑えませんでした。この短編には「寓話」
という副題が付されています。

ポーの作品は当初パロディを意図して書か
れたという指摘があります^⑥。ただし、対象を
客観化して喜劇性を生み出すこの傾向と同時
に、当の対象への没入、悲劇的な同一化の衝
動もポーには見られるといえます。この指摘
によれば、よく知られた短編「ウィリアム・
ウィルソン」に登場するもう一人の自分とは、
(近代的)自我のパロディです。語り手は自
分と同姓同名のウィリアム・ウィルソンと少
年期から対立し、長じて彼を刺し殺してしま



"A Descent into the Maelstrom" (メエルシュトレムに吞まれて) より。この海域特有の地形と潮の満ち引きによって生じる大渦は、船や鯨を吸い込み、渦底に運び去ることで知られていた。

"William Wilson" (ウィリアム・ウィルソン) より。

います。挿絵のキャプションには、「私の死で、お前がどれほど完全に自分を殺してしまったかを、お前自身であるこの姿で見ろ」という一文が引用されています。先の二つの短編「群衆の人」「沈黙」も含めパロディの対象は様々ですが、対象となるオリジナルの問題状況は、ポーの時代から2世紀近くを経た現代にも通じるものがあるように思えます。

このほか本書には、14世紀のロンドンを舞台とした「ベスト王」、ノルウェー近海の大渦に呑み込まれた漁師の話「メエルシュトレムに吞まれて」、病と美女をモチーフとした「リジア」(1ページ参照)などの短編が収録されています。最後に収録されている「ランダーの別荘」という短編は、「アルンハイムの地所」の付録」という副題が付されています。「アルンハイムの地所」は、莫大な遺産を相続したエリソンという人物が、アルンハイムという広大な土地に、造園により理想の人工風景を作り上げる物語です。「ランダーの別荘」でも美しい風景が描写されています。クラークの挿絵はちょうどステンドグラスのように、鮮やかな色彩を放っているようにも見えます。



1 内田市五郎編著『エドガー・アラン・ポウと世紀末のイラストレーション』（双書 美術の泉66）岩崎美術社，1987，p.11<請求記号 KC482-E91>

2 Kelly Sullivan, "Harry Clarke's Looking Glass," 2016.10.13. Public Domain Review Website <<https://publicdomainreview.org/essay/harry-clarke-looking-glass>>; "Harry Clarke's Illustrations for Poe's Tales of Mystery and Imagination (1919)." *idem* <<https://publicdomainreview.org/collection/harry-clarke-s-illustrations-for-poe-s-tales-of-mystery-and-imagination-1919>> 参照。

3 リチャード・ダルビー（吉田新一・宮坂希美江訳）『子どもの本』黄金時代の挿絵画家たち』西村書店，2006，pp.101-102, 145-146<請求記号 KC482-H586>; 海野弘解説・監修『ハリー・クラーク アイルランドの挿絵とステンドグラスの世界』バイインターナショナル，2014，pp.8-25<請求記号 KC482-L217>; 春燈社編『おとぎ話の絵画史 挿絵黄金時代に描かれた魅惑の幻想世界』辰巳出版，2019，pp.130-135<請求記号 KE177-M7>; 前掲『エドガー・アラン・ポウと世紀末のイラストレーション』p.11参照。

4 前掲"Harry Clarke's Looking Glass"参照。

5 アフリカの古名（古い呼び名）。エドガア・アラン・ポオ（佐々木直次郎訳）『譯註』『アッシュア家の崩壊 他九篇』角川書店，1951，p.224<請求記号 933-cP74u-5>

6 佐伯彰一「解説」E・A・ポオ（阿部知二ほか訳）『ポオ小説全集 1』東京創元社，1974，pp.406-422<請求記号 Y82-1073>

※ URL の最終アクセス日：令和4年3月3日

（上）"Lander's Cottage"（ランダーの別荘）より。
（下）"King Pest"（ペスト王）より。酩酊した2人の船乗りがペスト王とその一族に出会う。

大公開!

国立国会図書館での資料のデジタル化事業



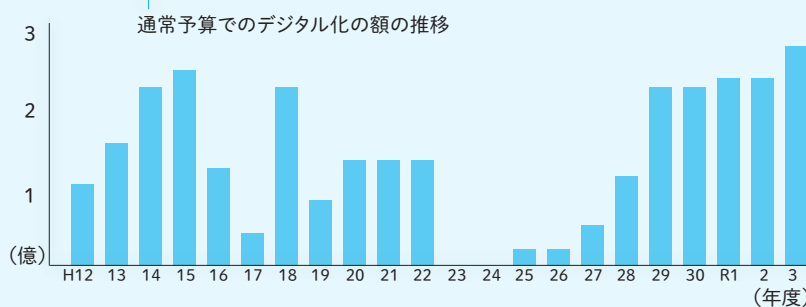
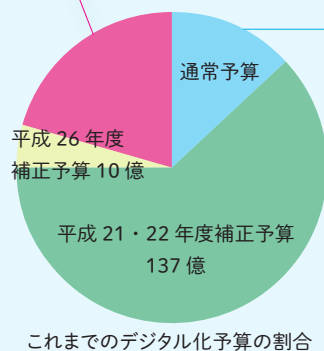
国立国会図書館では、令和2年度補正予算で所蔵資料のデジタルアーカイブ整備の経費として約60億円^{*}が認められたことを受け、令和3年度に、外注により図書約30万点・約4500万コマのデジタル化を実施しました。これは、平成21・22年度補正予算で資料デジタル化の経費として約137億円が認められ、約90万点のデジタル化を行って以来の大規模プロジェクトとなります。

資料のデジタル化というと、コピー機での単純作業のようなイメージが思い浮かぶかもしれませんが、しかし、30万点もの規模で、かつすべての資料が基本的に一点物で破損が許されないとなると、その作業はコントロールされた工業生産プロセスのようになっていきます。

本稿では、令和3年度の事業を例に、知られざる資料デジタル化の作業の内幕をお届けします。 (電子情報部 電子情報企画課 資料デジタル化推進室)

^{*}うち外注によるデジタル化分は約45億円

令和2年度補正予算 45億円



01 デジタル化する資料の選定・事前調査

デジタル化は対象資料を選定するところから始まります。令和3年3月に当館で策定した「資料デジタル化基本計画2021-2025」に基づいて対象の資料を選定していきます。評価基準として、唯一性、希少性、利用機会の拡大、劣化状況、保存の緊急性、デジタル化への社会的・学術的ニーズ等を考慮します。

ただ、基本的に大量処理が前提なので、1点ずつ選ぶというわけではなく、この資料群のこの年代のもの、という形で選定していきます。

選定

リスト作り
コマ数計算



対象が決まったら、資料が破損していないか等の状態チェックと、デジタル化対象資料のリスト作りを行います。令和3年度は、東京本館書庫のおよそ1層（1フロア）分、45万点のリストを作りました。

さらに、デジタル化はコマ数*での契約なので、ページ数や図版の数を元に大体何コマくらいになりそうかを計算します。中には古い資料でデータが整備されていなかったり、特殊な形状の資料もあり、試行錯誤しながら計算しています。

また、傷んでいる資料は補修も行います（→16ページ「館内スコープ」もご覧ください）。

*当館のデジタル化では、通常見開きページを1つの画像として撮影し、それをコマと呼んでいます。

02 資料の梱包

リストをもとに、資料をデジタル化事業者の作業場所に運ぶために、書架から抜き取り梱包します。資料が汚れたり壊れたりしないよう、緩衝材などと一緒に折りたたみコンテナ（オリコン）に詰めます。

1つのオリコンに入る冊数は25冊程度。令和3年度には、約18,000箱の箱詰めが行われました。箱1つが50L、全体で90万Lですから、全部で25mプール1.5個分程度の体積になりました。



梱包作業の様子



空っぽになった書架

03 資料の搬出

オリコンをトラックに積み込み搬出します。1回で運べるのは400箱程度です。令和3年度は延べ100台近くの10tトラックで資料の移送を行いました。



運び出す箱を間違えないよう、バーコードで管理し、1箱1箱チェックします



大きなトラックに積み込んで出発!

04 撮影前検査

ここから先は、専門の技術やノウハウを持つ、複数のデジタル化事業者による作業を委託しています。基本的に作業は分業制で、作業の区分ごとにラインがあるようなイメージになります。

資料が届いて荷下ろしをしたら、まず最初に、予定していた資料が全点届いているか、リストをもとに確認を行います。万が一にも資料を紛失することがないように、資料を移動させたり、デジタル化したりする都度、リストをもとにチェックしています。

リスト確認

次に、資料の大きさや状態を調べて、どのスキャナで撮影するかを決めたり、撮影時の注意事項をメモしたりします。

資料検査



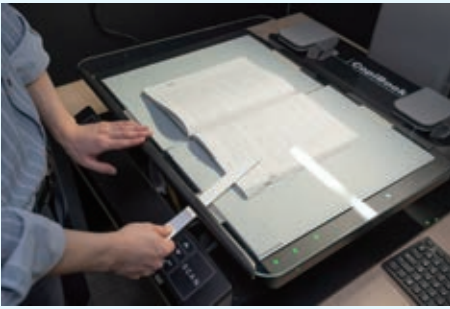
デジタル化作業中にも資料が劣化することがないように、デジタル化事業者の保管庫内は、国立国会図書館の書庫と同様の温湿度（温度22℃、湿度55%）を目安とし、かつ作業場所を保管庫との湿度差が10%を超えないようにしています。温湿度を定期的に測定、記録しています



検査の様子

05 撮影

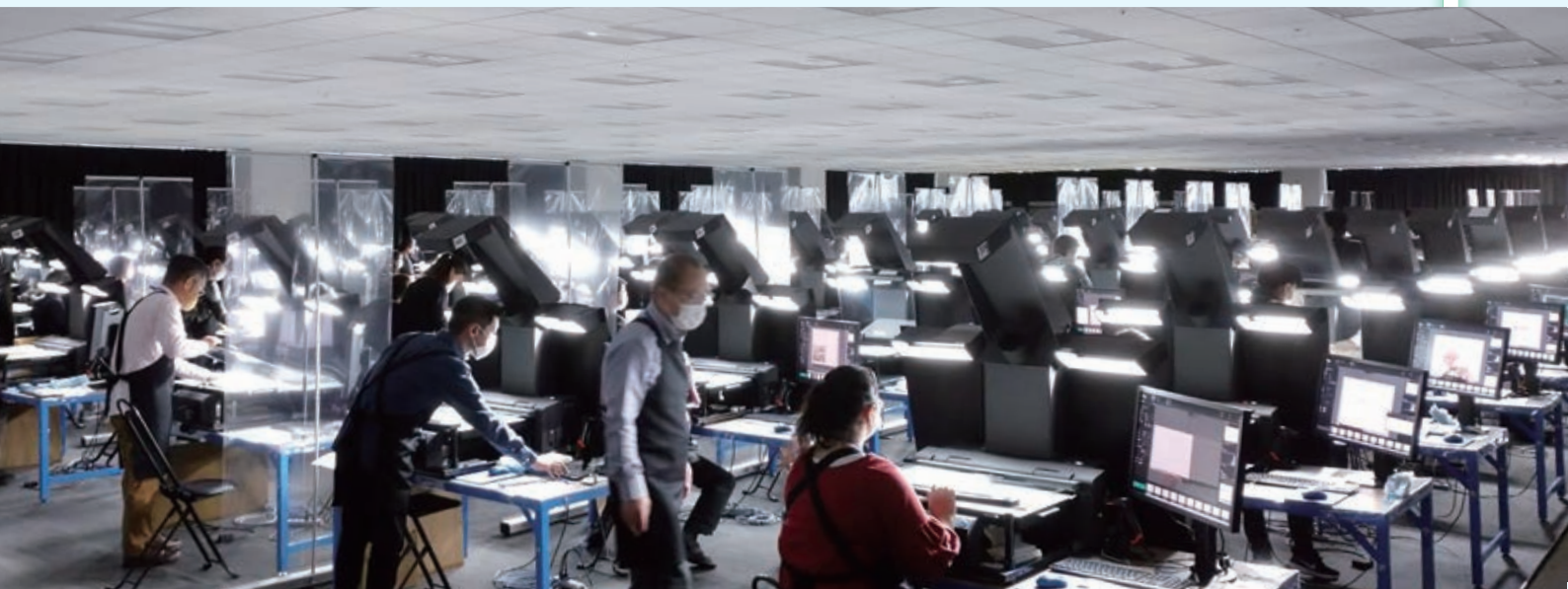
デジタル化＝撮影は、ブックスキャナと呼ばれる専用の機材を使って行います。大量のデジタル化を行うため、100台以上のスキャナが並ぶ姿は壮観です。



(上) ガラス板の下のページを物差しなどで整えます
(中) 厚みのある資料は左右の板の高さを調整
(下) テンポよく、かつ丁寧にページをめくります

撮影作業の生産性は、資料の状態（厚さ、開き、折り込み図の有無等）によって大きく変動しますが、おおよそ1人1日500～1,000コマ程度です。

撮影作業は、熟練を要する人手の作業です。資料を破損しないように、かつ資料の綴りに近い部分の文字などもはっきり読めるように、ガラス板で押さえながら撮影していきます。ガラス板が動いてしまうと画像がブレてしまいますが、テンポよくページをめくっていかないと生産性が上がりません。



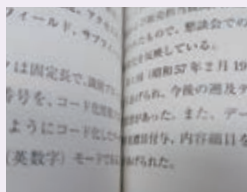
デジタル化の工夫

一言で図書といっても、その大きさ、厚み、製本などは実にさまざまです。きれいに、かつ画像を見て原資料の状態が分かるようにデジタル化するには、その違いに合わせた対応が必要になります。その一部をご紹介します。

撮影の工夫！

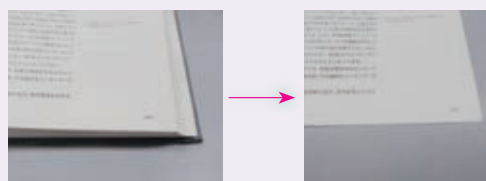
綴じ不良の資料

資料を開いても、ノド元の文字が隠れてしまい読めないような資料については、解体してから撮影します。資料を綴じるのに使われている素材や手法は様々なので、それぞれの綴じ方に応じた方法で解体を行います。



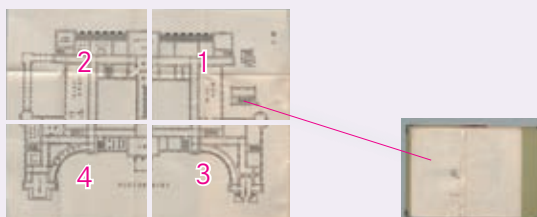
極厚資料

ぶ厚い資料はそのまま撮影すると、資料がゆがみやすくピントが合わなくなったり、資料の表紙付近と中央付近で余白の面積が大きく変わったりして、見づらいものになってしまいます。そのため極厚資料の場合は、背景紙と同じ色の間紙を挟み込み、小口を隠し立体感をなくして撮影することを許容しています。



折り込みページ

図版や正誤表などのページが折り込まれていることがあります。こういった折り込みページは、原資料の状態が分かるよう、折った状態のページを撮影した上で、広げた状態のページを撮影します。広げたページが大きく、資料本体と同じサイズで撮影できない場合は、少しずつ重なるように分割して撮影します。分割順序は資料本体のページ遷移方向に基づいてルール化しています。



少し変わった形態！

デザインとしての切り抜き

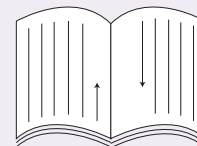
複数のページに切り抜きがあり、重ね合わせると前後のページが覗いて見えます。デザインとして切り抜きがなされていると判断し、それぞれのページ単体、重ね合わせたページをなるべく多くのパターンで撮影しました。



菱沼良樹 編著『風光衣服』用美社 1986<請求記号 EF25-413>

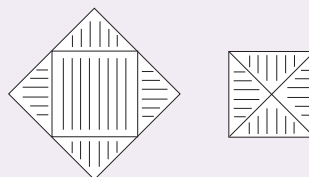
後半部分が天地逆

デザインとして、資料の後半部分が全て天地逆に装丁されています。読みやすさを考慮し全て向きを揃えて撮影した上で、メタデータの備考に「後半は天地逆綴じ」と注意書きを行いました。



正方形に折られた資料

両面に情報があり、それぞれの段階を見ることで初めて意味を持つため、表裏の全ての展開図を撮影しました。

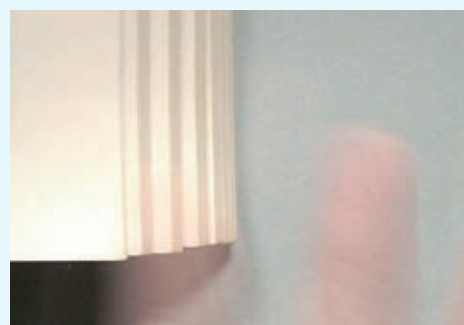
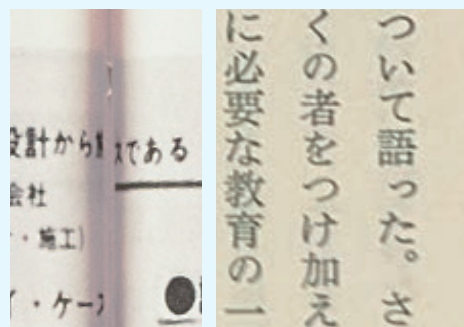


06 品質検査・再撮影

撮影した画像の品質の検査を行い、問題があるものは再撮影を行います。この時点で相当数のエラーが検知され、再撮影に回っているようです。

エラーの内容としては、ページを飛ばしてしまう、逆に同じページを2回撮ってしまう、ピンボケ、指が写り込んでしまう、等多岐にわたります。

仕様での基準は、エラー率0.5%以下。これを達成するために、各社様々なノウハウを駆使して品質を高めているようです。それでも、全体で4500万コマもあるため、一定のエラーが生じるのは不可避です。



右上から時計回りに、ピンボケ、指の写り込み、ノドの開きが足りない例



撮影した画像を見ながら、どのコマからどのコマまでが目次かを確認し、コマ数を入力していきます

07 目次データ等の作成

撮影した画像の公開のため、資料の目次のテキストデータや、資料のタイトル・出版年等について記述したデータ（メタデータ）等を作成します。

従来は目次の文字起こしデータを作成していましたが、令和3年度は、デジタル化を優先するため、目次については目次の有無とコマ数だけ採録するという仕様になりました。品質の高い文字入力作業もまた、非常にコストのかかる作業なのです。

08 全体プロジェクト管理

撮影だけでも1社あたり100名以上が関わる大規模な生産業務ですので、綿密なプロジェクト管理が必要となってきます。

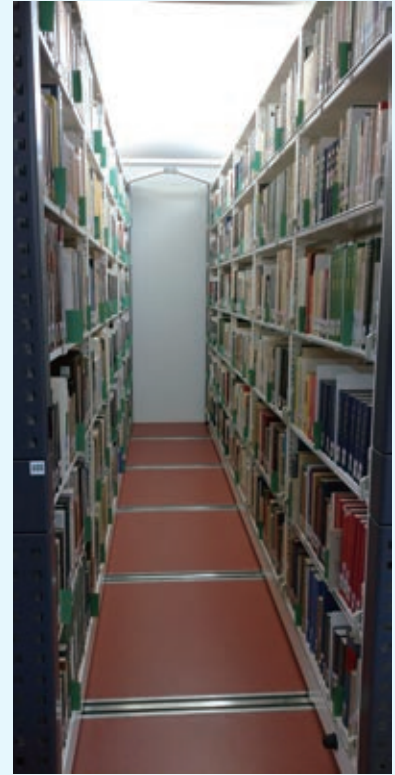
大量のデータを扱うために様々なシステムも必要ですし、撮影作業には習熟が必要で、生産性が読みにくいため、人的マネジメントも難しいようです。加えて令和3年度は、新型コロナウイルスの流行や世界的な半導体不足等の影響にも対応が必要で、非常に困難なプロジェクトであったと思われます。

09 資料の返却

デジタル化が完了した資料は、当館に返却され、書架に戻されます。これまでは東京本館書庫に戻していましたが、デジタル化済みの資料は、いずれは関西館の書庫に移送する計画になったため、令和3年度はデジタル化が完了した資料を直接関西館に移送する方式を取りました。



関西館に移送された資料を開梱し、1点1点に関西館書庫での排架場所を示す記号を付与して書庫に並べていきます



10 デジタル画像の納品

検査が終わった画像は、目次データ等と一緒にハードディスクで納品されます。データ量は約10,000冊で1.5TB程度でした。



令和3年度デジタル化事業で納品されたハードディスクは、延べ約200台にもなりました

11 デジタル画像の検品



検品システムの画面。画像のうち、ページ数の部分だけを一覧化して、抜けがないかを確認します

納品された画像について、国立国会図書館側でも検査を行います。

令和3年度は、検品作業のための新システムを内製し、エラーをシステム上で一覧化して管理できるようにしました。検品システムでは、画像全点のファイル形式やテキストデータとの整合性を機械的にチェックするとともに、ランダムサンプリングした一部の資料について目視確認を行っています。

12 デジタル画像の登録・公開



(上) デジタル画像のデータが保存されているストレージ
(下) 国立国会図書館デジタルコレクションの次期システム（開発中の画面）

デジタル化した画像は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開します。

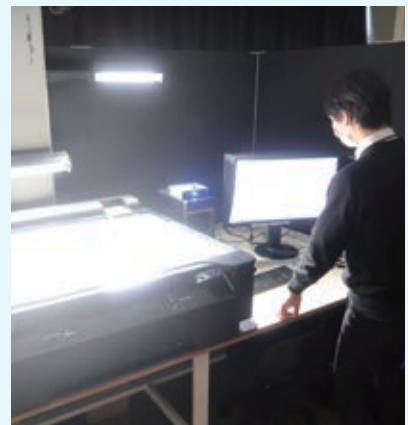
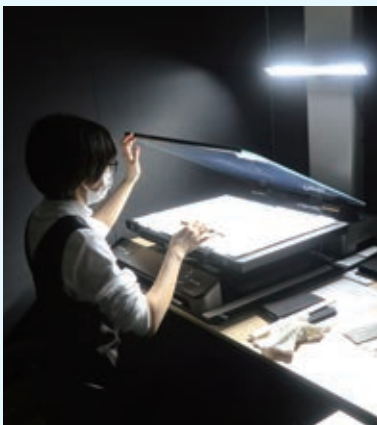
デジタル画像はハードディスクで納品されますが、デジタルコレクションのシステムはデータセンターにあるので気軽につなぎに行くわけにはいきません。回線で少しずつ転送します。そのため、デジタル化が完了しても公開までに時間がかかるのが現状です。

こういった問題点を解消するべく、現在国立国会図書館デジタルコレクションの次期システムを開発しています。

番外 内製デジタル化

ご覧いただいた通り、大規模なデジタル化は一種の工業生産プロセスですので、外注により合理的にできるのは、均質な資料が大量にあるような場合です。少量で、かつ資料の形態が様々であるような資料は、発注者側にも、受託者側にもリスクがあります。

そこで、撮影の難易度が高いもの、劣化しているもの、利用が多いものなどは、館内で職員がデジタル化を行うこともあります。令和3年度には、このための機材をそろえたメディア変換室を東京本館に整備し、古い児童書、官庁小冊子、レーザーディスクなど特殊メディアのパッケージの撮影などを行っています。



協力：株式会社ムサシ、日本通運株式会社

◆ ◆ テキスト化 ◆ ◆

資料をデジタル化すると画像データとしてより便利に扱うことができるようになりますが、そのままでは中身の文章の検索はできません。この「中身」の情報を画像データから作成する、つまり「テキスト化」する必要があります。

令和2年度補正予算では、デジタル化作業に加え、コンピュータに文字情報を読み取らせるOCR（光学文字認識）処理によるテキスト化作業も実施しました。

今回テキスト化の対象としたのは、「国立国会図書館デジタルコレクション」に搭載されている、令和2年度までに当館がデジタル化した図書・雑誌等ほぼすべての活字資料約247万点（なんと約2億2300万画像！）です。明治期・大正期刊行図書から、2010年頃刊行の雑誌まで、幅広い刊行年代のデジタル化資料をテキスト化しました。

（電子情報部 電子情報企画課 次世代システム開発研究室）

Q. いつから使えますか？

A. 一部はもうお使いいただけます！

著作権保護期間満了資料から作成したテキストデータは、実験システム「次世代デジタルライブラリー（<https://lab.ndl.go.jp/dl/>）」の全文検索機能でお試しいただけます。なお、著作権存続資料を含む全てのOCRテキストデータを利用した全文検索は、令和4年12月中にリリース予定の次期「国立国会図書館デジタルコレクション」上で提供する予定です。

Q: テキスト化で何が便利になるの？

A: 検索、読み上げ、情報解析です。

まず、本の中身の検索ができます。目を皿にしてページを見て探す必要はありません。

視覚障害のある方には、読み上げが可能になります。

また、「いつ頃から●●という言葉が広まったのか」といった情報解析も可能です。様々な研究活動にも役立つことが期待されています。

次世代デジタルライブラリーで…

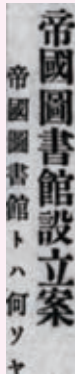


検索すると、ヒットした部分にマーカーがつきます



該当箇所には、ピンが立ちます。本文のほか、画像キャプションも検索対象です

今回のテキスト化の作業



帝：読める
國：まあ、読める
圖：トハ何ソヤ……？
※筆者の心境です

世の中には、レシートや名刺から必要な文字情報（テキスト）を読み取るOCRサービスがいろいろありますが、国立国会図書館の多様な資料に最適のものはありません。そこで、OCRサービスを提供している業者に委託し、国立国会図書館の資料に特化するようにOCRを改良してもらいました。

「特化」の例として、例えば旧字体の活字が多く出現する明治時代の文献も正確に読めるようにするにはどうしたらよいでしょうか？

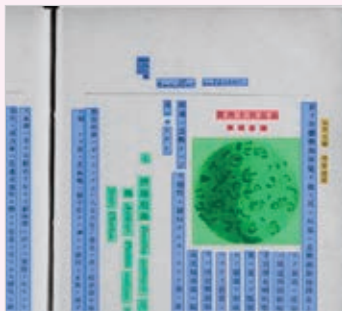


学習
+

処理方法の研究開発

昨今急速に研究の進んでいるAI（機械学習）技術を駆使しました。当館のデジタル化資料を分析し、正しい読み方をOCRに学習させるのです。その学習用の「お手本（画像と正しいテキストのセット）」作り（これは人間が人手で作ります）とあわせて、当館の資料に特化した処理方法の開発も行いました。

なお、テキスト化にあたってOCRは、どこが本文なのか、どこが図版なのか、といった紙面のレイアウト解析を行い、読み取るべき領域を特定した上で、文字の認識を行っています（左画像参照）。



紙面のレイアウトの要素ごとに色を変えています



出力!

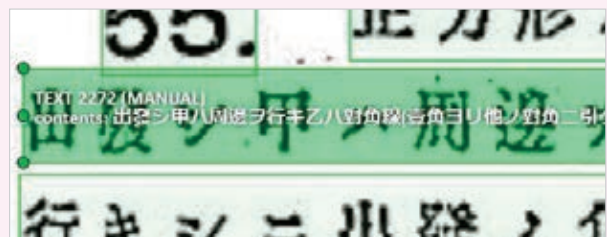
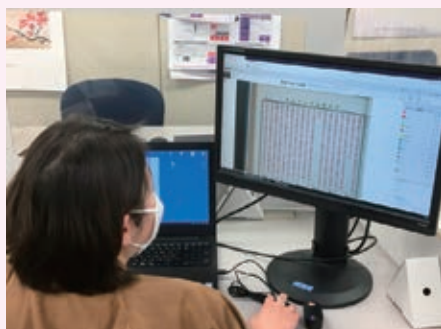
文字認識の精度は、既存のOCRサービスで計測した結果を、ほぼ全ての年代・資料種別で上回りました！



検品

今回のテキスト化作業の検品対象は大きく分けて2種類あります。OCRがお手本とするための人手で作られた学習用データと、OCRが実際に出力した、当館が全文検索等に利用するテキストデータです。前者は当館の定めた形式に沿って正確に作成されているか、後者は当館の指定する品質水準をクリアできているかを、プログラミングによる機械的な自動チェックと目視によるチェックを併用して確認しています。

複数の解釈が可能な紙面のレイアウトがあったり、古い資料は特に文章の区切りが分かりづらかったりと、人間が見ても「正解」の判断が難しいことがあります



画像の文字の上に、テキストが表示される画面で検品します



「デジタル化への旅支度」



家族や友人と仕事の話をしている時、「デジタル化の担当だよ」と言っていると、「じゃあスキヤナで本を読み込んだりしているの?」とよく聞かれますが、私のやっている仕事はこのイメージとは少し違っています。というのも、現在当館では大規模なデジタル化事業を実施しており、スキヤニング作業のほとんどは外部に委託して行っているからです。私が所属する図書係では、本がデジタル化事業者のところへ旅立つ前の「旅支度」——具体的にはデジタル化の対象資料の選定やリスト作成、補修作業に取り組んでいます(7ページ参照)。

この業務に特に欠かせないのが現物調査です。書庫内で本を1点1点、中身や大きさ、破損状況などを確認していきます。分厚く重い本だったり、折込み図を広げると幅が1mを超える本もあるので、時には複数人で協力して本を広げて調査を行っています。

こうした調査の結果に基づいてデジタル化する本を決め、リストを完成させます。リストには本を識別するタイトルや巻号といった書誌情報のほか、調査結果も記録していきます。このリストを頼りに後続の作業が進められます。膨大な量の本をデジタル化するので、リストの誤りは本の迷子やのちのちの作業への支障につながりかねず、とても

気をつかう作業です。

リスト作成とともに忘れてはならないのが、本そのものの出発準備です。付録がついている本には内容を記録したラベルを貼り付けたり、破損している本にはデジタル画像にした時の見栄えにも配慮しながら簡単な補修をしたりもしています。

一つ一つはこまごまとした作業が多いのですが、こうした業務を担当する中で改めて当館の所蔵資料の幅広さに気づかされます。綺麗な布見本が貼り込まれた本には思わず見入ってしまったり、複雑に折り畳まれた人体模型図を見つけた時は、どうやってスキヤニングするのだろうと考え込んでしまったり……表紙に陶板が埋め込まれた本もありました!(これには陶器の部分の破損防止と周囲を傷つけないよう、カバーをかける処置をしました。)

自分が手を施した本がデジタル画像となって後世に残っていくのは少し恥ずかしい気もしますが、今まで紙の状態でも読み込まれてポロポロになっていた本がパソコンやスマホなどのデバイス上で読めるようになるのは嬉しい限りです。少しでも良い状態でデジタル化の旅へと出られるよう、今日もせっせと荷造りを整えます。

(図書館資料整備課 図書整備室 夜行列車)

資料の世界の歩き方

写真を読む

あしなふみ
葦名 ふみ

第4回

新聞写真の歴史と背景



新聞に掲載される写真は、最新のニュースを彩るだけでなく、歴史的な写真の宝庫です。新聞は長くメディアの一角をなしてきました。そのため、少し古い時期の写真を探すと、テーマによつては、新聞社・通信社の撮った写真の独壇場となることがあります。

この記事では、新聞写真の草創期にさかのぼります。新聞に写真が掲載され始めた明治二〇年代から昭和三〇年代までのオリジナルの写真や記録を紹介することで、写真が新聞に掲載されるまでの一昔前のプロセスや新聞写真の歴史を探ります。

新聞写真の特徴

過去を知るための素材として見た場合、『新聞写真』にはいくつかの特徴があります。

第一に、速報性が挙げられます。新聞はいち早くニュースを報じるメディアであることから、写真記者は、急いで現場に駆け付け、ときに決定的な瞬間をとらえています。

第二に、その撮られる被写体の幅広さです。言うまでもなく、新聞紙上にしか見つからない被写体はとて多くありま

全国紙の新聞写真データベース

データベース名	URL	概要
朝日新聞フォトアーカイブ (朝日新聞社)	https://photoarchives.asahi.com/?gclid=EAlaIQobChMIOYXh4una9QIVlIVgCh2hRAOMEAAYASAAEgLSePD_BwE	朝日新聞社の所蔵する写真、映像のデータベース。歴史写真も多く、「朝日世界ニュース」など戦前の映像ニュースも収録。
毎日フォトバンク (毎日新聞社)	https://photobank.mainichi.co.jp/	毎日新聞社所蔵写真のデータベース。このデータベースの前身の光ディスク MAIHIT が新聞写真のデータベースの先駆けとなった。
よみうり報知写真館 (読売新聞社)	https://database.yomiuri.co.jp/shashinkan/	読売新聞・報知新聞のカメラマン、記者が撮影した写真のデータベース。
KYODO NEWS IMAGELINK (共同通信社)	https://imagelink.kyodonews.jp/	共同通信社および国内外のパートナーが撮影した報道写真・映像が掲載されるデータベース。戦前の通信社である日本電報通信社に由来する写真も収録。
新聞通信調査会デジタルアーカイブ	https://j-dac.jp/chosakai/	昭和戦前期の主要通信社であった同盟通信社の資料公開サイト。同盟通信写真ニュースも網羅的に閲覧・検索できる。

本稿で紹介する新聞

- ・朝日新聞 (Z81-1、YB-2)
- ・国民新聞 (新 -501、YB-188)
- ・東京朝日新聞 (Z81-1、YB-2)
- ・東京日日新聞 (Z81-6、YB-6)
- ・報知新聞 (Z86-3、YB-18)
- ・毎日新聞 (Z81-6、YB-6)
- ・読売新聞 (Z81-16、YB-41)
- ・萬朝報 (新 -515、YB-142)

※ () 内は原紙請求記号とマイクロフィルム請求記号。
※ご利用はマイクロフィルム等となります。

す。事件はもちろんですが、季節の情景や風物詩をとらえた何気ない写真が、後に、貴重な記録写真となっていることがあります。

第三に、新聞紙上の写真は、キャプションが明快で、年月日、撮られた場所や人物が明らかなのが多いことです。近くに掲載される記事の本文も、写真を読み解く手がかりを与えてくれます。

第四に、撮影の意図が明瞭な写真が多いことです。ニュースのかたわらに掲載されている新聞写真は、部外者にとって、(芸術のジャンルで撮られる写真に比べて) 相対的に意図が分かりやすいといえます。寓意が隠れていることもあるとはいえ、後年においても使いやすい写真といえます。

こうした事情が重なりあって、「この写真に何が写っているか」が皆目分らないときに、それが新聞とは全く関係ない写真であっても、新聞写真を調べ直すことが、図らずも有効な手法になるところがあります。

いえます。

他方、新聞社・通信社においては、写真のデータやその原写真は、取捨選択の上、長く蓄積される商用の資源です。再び紙面に活用できる可能性もあるからです。

自社の保存写真のデータベースを一般公開している社の中には、その収録画像数が数百万点の規模に達しているものもあります。これらの写真に特化したデータベースは、写真を探す際に、もはや欠かすことのできないものになります。

明治・大正・昭和戦前期のように古い時期の場合、当時の新聞紙を閲覧できたとしても、画質が悪いという問題がありました。データベースに紙面のもとになった写真がある場合、製版前のオリジナルの写真が収録されている確率も高く、より鮮明な画質の写真にたどり着けることも朗報といえます。

最初の製版された新聞写真

新聞紙面に最初に写真が載ったのはいつでしょうか。

集合知として
読者にとってみれば、新聞紙面の写真との出会いは、基本的に一回性のものと

明治二二(一八七九)年に、写真のプリントを直接新聞本紙に貼り付けた週刊



犬養毅



B 明治23年8月1日号外に掲載された田中正造(右)、芳野世経(左)。芳野は著名な漢学者の家に生まれ、衆議院議員当選前に東京府会でも活躍。ちょんまげを残した議員として知られた



C 明治25年4月17日号外に掲載された植田理太郎(右)、明治23年7月22日附録に掲載された小坂善之助(左)。植田理太郎は奈良県議会議員を経て第2回選挙で当選(奈良2区)。小坂は、信濃毎日新聞創業者。『毎日新聞』の附録で見る限り、第1回総選挙の当選者のうち最も髭が濃い議員の一人



1 毎日新聞社の委託を受けてこの製版をなしたげたのは、猶興社を興した堀健吉(1856-1934)であった
『毎日新聞』附録<憲政資料室収集文書1342・1498>

A 上は明治24年2月11日号外の全体画像

の『写真新聞』(全真社)が発行されたことがありました^①。

もつとも、写真製版を経た新聞となると、明治二三(一八九〇)年のこととなります。

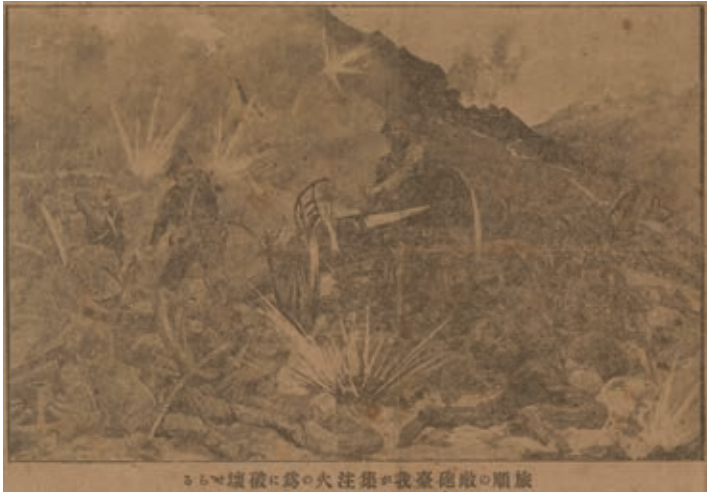
帝国議会の開設に際して刊行された『毎日新聞』の附録であり、紙面に載ったのは、帝国議会の議員たちの顔写真でした。

画像1がそれです。写真のように濃淡のある原稿を表現するには、写真を版材に移したうえで、網目スクリーンを用いて網点(点の集合体)に変換することになります^②。この附録が写真製版の初めの実践例なのです。

小学校一年生のころにこの附録の発刊に接したある人物は、「何だか、新聞界に大変革が起こったとか、何とかいうことを父兄たちが話し合っていたことを夢のように記憶する」と振り返っています^③。

当時、この附録を見た人たちの驚きもうなずけます。実物を手にとって眺めてみると、大判の紙面で議員の顔が精巧に網点に変換されているさまは、印刷された写真にすっかり見慣れた今日でも、壮観です。

当時の議員には髭を生やした人が多



4 日露戦争「旅順の敵砲台我が集注火の為に破壊せらる」『国民新聞』明治37（1904）年10月4日付



3 鈴木眞一撮影の写真をもとにした徳永柳洲の画「肖像画報」百六十五（沖守固愛知県知事）『萬朝報』明治32（1899）年1月22日付<佐々友房関係文書 1008>



2 大相撲の記事『報知新聞』明治37（1904）年1月14日付

く、髭の形はさまざまですが（画像1C）、こうした髭の濃さの違いも鮮やかに表現されています。

製版に先だって、当選者の写真を網羅的に集めることも、相当の手間であったと思われる。

こうして先鞭がつけられた写真製版の研究に熱心だったのが『報知新聞』でした。明治二九（一八九六）年には、お正月の記念に報知新聞社の社屋と女性の写真を組み合わせた写真版の附録を刊行し（二月二日付）、評判を呼んだといえます。

版画との共存

もともと、別刷りの附録や号外はともかく、日露戦争前頃までは、新聞本紙に写真が掲載されていることはまずありません。

当時の新聞の印刷機に写真の版を組み込んで載せる技術がなかったため、大相撲の決まり手などでも、写真ではなく絵で表現されています（画像2）。

それ以前から報道への写真の利用はあり、写真をもとに木版・石版印刷を行ったりするものなど（画像3）、版画制作や錦絵においても、写真の活用や参照はみられます。

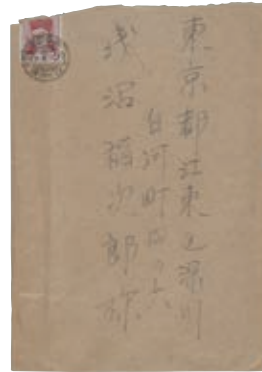
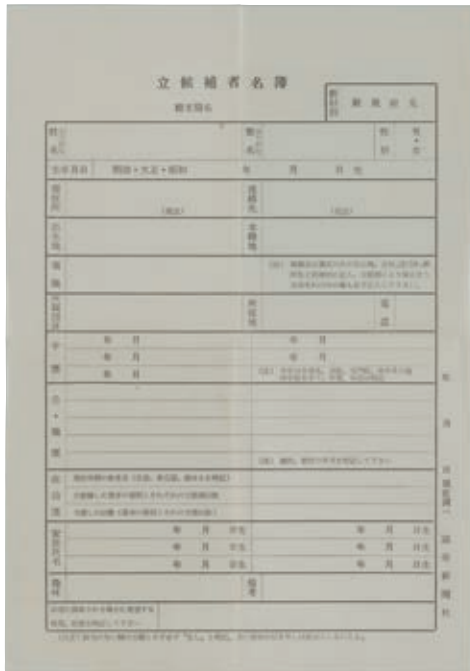
日露戦争の頃の新聞紙面でも写真より絵を用いるもの（画像4）も多く見受けられますが、徐々に写真が多用されるようになっていきます。

写真の収集と喪失

新聞写真の中でも顔写真は出番の多い重要なコンテンツで、新聞社の側が撮影するだけでなく、本人に写真の提供を依頼することもあります（画像5）。

新聞社に蓄積されていく写真が、不慮の出来事により失われたこともあります。天災、空襲、太平洋戦争後やむなく行われた写真の一部焼却などです。

特筆すべき例を挙げれば、読売新聞社の場合、新社屋の落成記念会の日（一九三三年九月一日）が関東大震災の日にあたるという不運がありました。それにもかかわらず、昭和一八（一九四三年）時点で同社資料部には、人物、スケッチ、風物などの写真が八〇万枚あったといえます。しかし、昭和二〇（一九四五年）五月二五日夜の空襲で、本社は本館、別館とも炎上しました。同部の図書は昭和一九（一九四四年）年一〇月に秩父に疎開していましたが、写真は普段から使うもので疎開の対象ではなく、その大半が失



5 読売新聞社が総選挙に先立ち立候補予定者に対して履歴情報や写真2枚を求めた依頼文書。昭和35(1960)年8月23日付。浅沼稻次郎旧蔵の資料で、返送はされなかった模様<浅沼稻次郎関係文書(その2)書類の部4194-2>

われたといひます。

こうした資料の喪失を補うために、同社では、昭和二四(一九四九)年には、人物写真二六〇〇枚、スケッチ一〇〇〇枚、人物横顔一六〇〇枚など、計画的に人物写真の新規撮影を進めたといひます。^⑥

のんびり(?)した撮影

今日、新聞社は自前で撮影を行い、入手困難な画像に限定して通信社や個人から購入しています。

こうした現代の方法とは異なり、新聞写真の草創期に、写真を用意したのは、新聞社や通信社ではなく、主に製版会社でした。製版会社とは、印刷や製版を担う会社です。写真を掲載するために、撮影だけでなく版を作る技術が必要で、それらを一体化して販売していたのです。

注文を受けていた製版会社の社主によると、明治三〇年代では「五六日も雨が続きと、殆んど休業状態」「雨と見れば注文者「新聞社」もやかましくは云はず、雨だから仕方がないと、御得意先の方か

ら諦めてくれるといふ有様」ながら、天気が好くなると一気に急ぎ立てられるなど、お天気任せの悠長さがあったといひます。^⑦

お天気任せの一因として、当時は、フィルムではなく、ガラス製の原板を使っていたことがあります。

したがって、戸外の写真では天気が、室内の写真でも採光が重要で、露光の観点からいっても、晴天の日に撮影することが好まれたのです。

明治四〇(一九〇七)年には、東京で大洪水がありました。この年に東京朝日新聞社に営業部庶務係兼写真撮影係として入社したある記者は、洪水の写真を三枚撮った。三日分あるから、残り二日間には休暇でよいと上司(社会部長)から言われたことを懐しんでいます。^⑧

版を作るのにも手間がかかり、何枚も載せられない時期とはいへ、時間の流れが今とは違うと思わされます。

わが国の話に限りませんが、新聞に写真を載せることは俗であり、新聞社としての格に響くという考え方も、当時はあったようです。^⑨

犬養氏の除名問題



武富時敏、犬養毅、箕浦勝人、大石正巳

6「犬養氏の除名問題」と題された写真

右から武富時敏、犬養毅、箕浦勝人、大石正巳『写真タイムス』2 明治42(1909)年3月<雑61-520>『写真タイムス』は雑誌のように販売されるだけでなく、明治製版所の写真カタログであったともいえる

異色の写真

画像6は、明治製版所が定期的に刊行していた『写真タイムス』という雑誌に掲載された写真です。

武富時敏・犬養毅・箕浦勝人・大石

正巳といった憲政本党の主要幹部の写真です。当時の憲政本党では、改革派(大

石ら)と非改革派(犬養ら)の内紛があり、同党の動向にはニュースバリューがありました。

写真の撮影は明治四一(一九〇八)年

一二月です。その後も、ますます内紛は深まり、『写真タイムス』の刊行時期(翌

年三月)には犬養の除名が本決まりとなりました(のち除名は取り消し)。

その犬養と大石が同じ一葉におさまっています。紙で鼻から下を隠し、ポーズ

を作る大石のユーモラスな姿もさることながら、この写真が圧倒的に珍しいのは、

日比谷にあった帝国議会の議事堂の政党控室という撮影場所です。

当時、議事堂の建物内への立ち入りは厳しく制限され、議員の姿を控室で捉え

た写真は、まずありません。一般人が国会議事堂の政党控室のエリアに入ること

は、至難なのです。

東京朝日新聞社の社員であった島内

登志衛の旧蔵資料(立憲憲政資料室所蔵)

に、明治製版の台紙に貼り付けられたオリジナルの印画(画像7)が偶然残されていることから、背景をうかがい知ることができます。

写真の裏書によると、この写真は、東

京朝日新聞社所属の谷口徳次郎の撮影です。谷口は、前年に朝日新聞社に入社し

たばかりの新米カメラマンで、のちに初代写真部長となりました。新聞記者の谷

口であれば、議会の出入りに必要な記者

徽章(議会立ち入りのためのバッジ)を入手して議事堂内に立ち入ることができ

たはずで、この写真は『写真タイムス』に掲載されていますから著作権は明治製版

所側が持ったと思われますが、新聞社のカメラマンと製版会社が協力関係にあっ

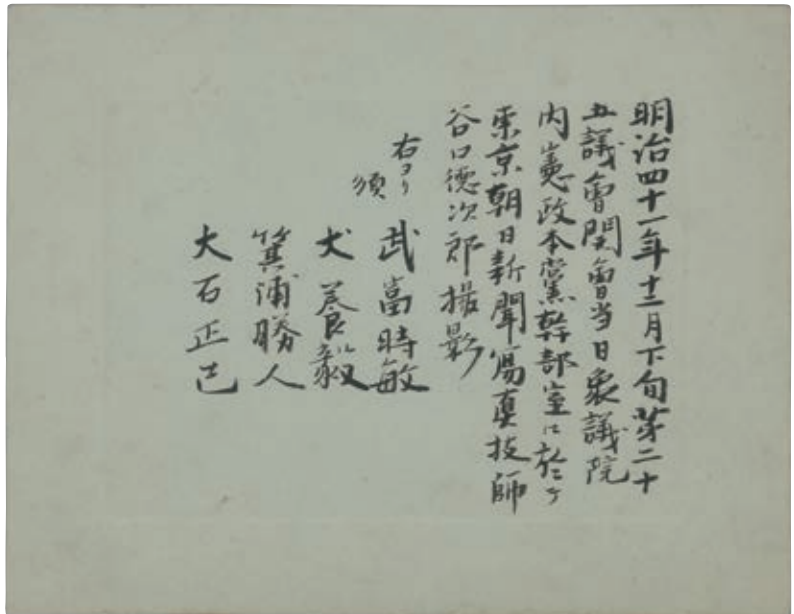
た時期の合作です。だからこそ、珍しい場所での撮影が実現したといえるでしょう。

製版会社から通信社へ

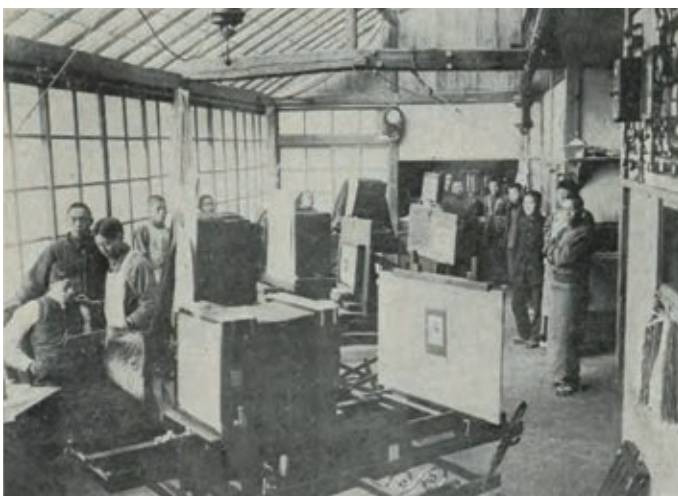
第一次世界大戦が勃発するころになると、明治製版所、辻村製版所等の製版会

社の競争も激化し、ニュース写真の各社への提供を盛んに行うようになりました。

事件の出張撮影を行った上で、自転



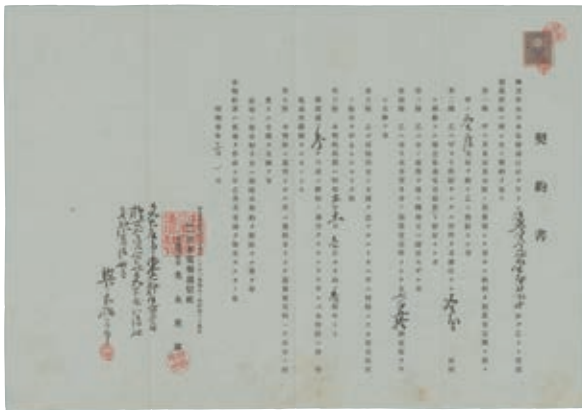
7 明治製版写真部の台紙付の写真
右から武富時敏・犬養毅・箕浦勝人・大石正巳 明治41(1908)年12月(第25回帝国議会開會当日)との裏書がある<島内志剛関係文書 1063>



8 読者向け新年挨拶のページに掲載された、明治製版所の社内『写真タイムス』12 明治43(1910)年1月<雑 61-520>

車にて小僧が先を競って各社に回って、製版の注文を引き受け、写真を販売している。萬朝報、やまと新聞、中央新聞、東京日日新聞、読売新聞、二六新聞などの主要紙は軒並み製版会社を利用しました。

新聞社自身としても撮影体制を整えたほか、大正から昭和にかけては、帝国通信社、日本新聞聯合社(現・共同通信社)と日本電報通信社(現・電通)の写真販売も盛んとなりました。⁽¹⁾一九三六年には同盟通信社が成立します。



9 電送写真通信契約書 光永星郎（日本電報通信社取締役社長）・與良松三郎（名古屋新聞社無限責任社員）
昭和3（1928）年11月1日<小山松寿関係文書 433>

撮影から印刷まで

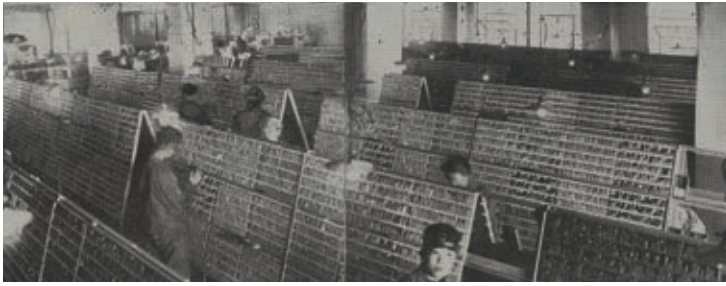
新聞製作のために写真が撮られ、印刷されるまでのプロセスには時期によって様々な変化があります。^(1,2)

写真が紙面に自在に登場するようになった昭和初期頃を例にとると、撮影↓
運ぶ↓
選ぶ↓
修整↓
組版↓
印刷のよう
に、様々なプロセスを経ています（イラスト参照）。

撮影の苦勞もさることながら、速報性を他社と競い、朝刊夕刊の締め切りがある新聞写真には、「運ぶ」苦勞があります。写真を「運ぶ」上で、画期となったものとして、電送（今日のファックス）のしくみがあります。

わが国では昭和三（一九二八）年の昭和の大札に間に合わせようと実現をみたもので、各社で模索が続き、このとき大阪毎日新聞社が試験電送に成功しました。

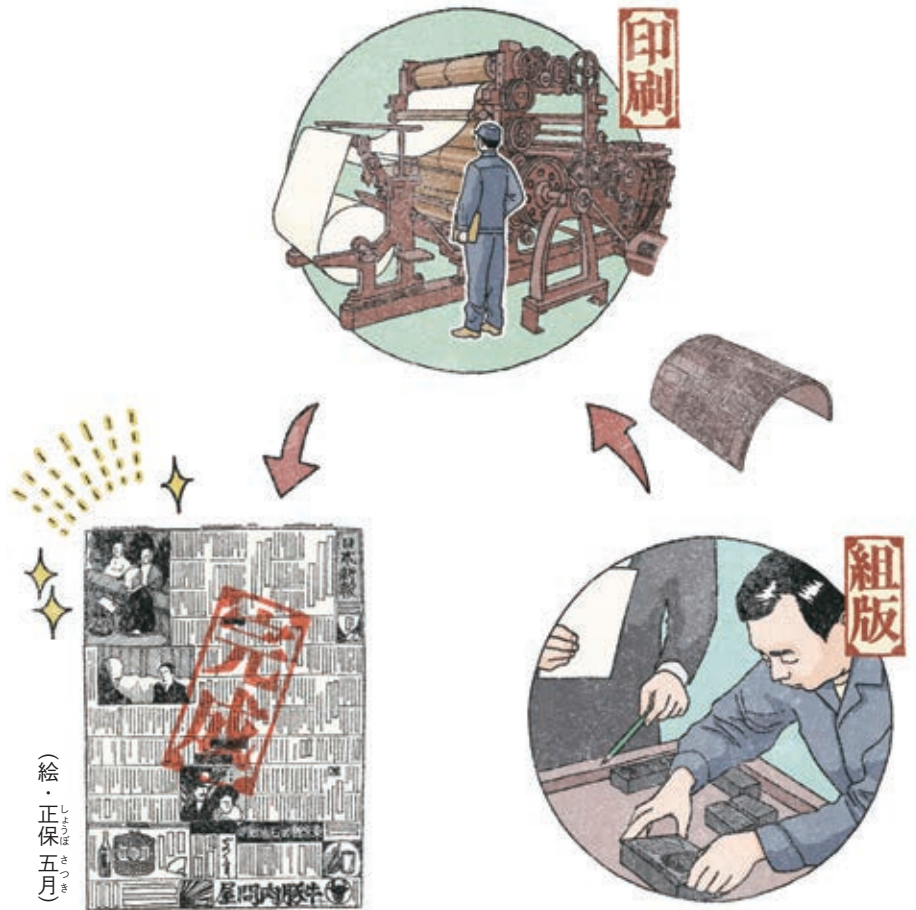
画像9は名古屋新聞（現・中日新聞）が、当時の主要通信社の一つである日本電報通信社との間で写真電送をめぐってとりかわした契約書の原本です。写真掲載時に「電送写真」とあわせて記すことなど、通信社の側でも諸種条件を付けたことがうかがわれます。



10 当時の名古屋新聞社（現・中日新聞）文選工場
『名古屋新聞社記念写真帖』1929<小山松寿関係文書 5092>



11 大阪毎日新聞社の鳩舎
平野岑一『新聞の知識』大阪毎日新聞社
1933<590-416 イ>



(絵・正保五月)
しょうほ まつき

朝日、東京日日、報知など大規模な新聞社の中には遠距離の配送のため、昭和初期頃に飛行機を導入した社もあります。

鳩の活躍

鳩も、昭和三〇年代ごろまでは、写真を運ぶ役目を担っていました。

鳩は、写真の原板であるガラス乾板は背負えません。フィルムカメラが普及し、フィルムを筒に入れて鳩に持たせられるようになったことで、新聞写真における鳩の必要性は高まりました。大正一一（一九二二）年七月、皇太子時代の昭和天皇の富士山登山の報道事例が、新聞社による鳩のフィルム輸送の先駆けといわれています。⁽¹³⁾ 軍から借り受けた鳩を山上から放したものです。

鳩の帰巢本能を利用したしくみなので、普段、鳩は新聞社の鳩舎で暮らします（画像11）。

鳩係（新聞社社員）は、かごに入れた鳩を持ち、一緒に撮影場所まで移動します。基本的なスタイルとして鳩は五・六羽で隊列を組み、先導役の鳩、写真フィルムを運ぶ鳩、写真の説明書き（キャプション）を運ぶ鳩に手分けして飛びます。



13 (上)「外相(右)と陸相(左)」『東京朝日新聞』昭和8(1933)年2月11日付
 (下)成沢玲川等『新聞写真の理論と実際』(アサヒカメラ叢書第7)東京朝日新聞社 1934 <請求記号 647-45>に掲載の写真
 大臣席の内田康哉外務大臣と荒木貞夫陸軍大臣



12 背後の木の茂みの濃淡が修正されている。降車中の西園寺公望と手を差し伸べる原田熊雄 <憲政資料室収集文書 1477>



沢山背負わせればスピードがあがらないからです。タカやハヤブサに襲われることなど、不慮の遭難も視野に入れる必要がありました。⁽¹⁴⁾

文字の原稿の輸送においても、伝書鳩は活躍しました。海上輸送も鳩を使うことがありました。出先では、現場の電話を争うときがあり、他社との競争で数少ない電話機を思うように使えないこともあります。自社の鳩に原稿を運ばせる手法のほうが柔軟な場合があったのです。

紙面と見比べる

製版に先立って、輪郭等の修整(レタッチ)を行うのは新聞に限らずしばしば行われる手法でした。新聞の用紙は写真写りのよい紙質ではないこともあり、当時の技術では、製版前にグレー色の絵具を用いた濃淡の修整を行っていました(画像⁽¹⁵⁾12)。

『東京朝日新聞』を例に、オリジナルの写真と実際に刊行された紙面を見比べてみると、修整の効果がわずかにうかがわれます(画像⁽¹⁶⁾15、16)。

修整の必要な写真

修整の事情が推察できそうな写真も見

てみましょう。

画像13は、予算委員会における外相と陸相です。

この写真に限らず、日比谷時代の衆議院予算委員会の写真には修整の苦勞を想像させるものが見受けられるのですが、大臣席や予算委員会の発言者席は、ガラス窓を背にした位置取りのため、カメラマンは逆光に苦しんだのだと思われるです。

画像14は、サンフランシスコ講和条約締結の際の吉田茂全権(首相)の写真です。⁽¹⁷⁾

このときの吉田の演説原稿は、筆(墨)でしたためられ、トイレットペーパーにもなぞらえられる大きな巻物であることは有名です。写真に写る吉田の手元の巻物の様子からみるに、ほとんど朗読に入っていない瞬間のはずです。各社はこの重大ニュースの報を相競いあつており、読み始めるか否かのタイミングで、撮影し、即電送に回したのでしょう。絵のようになっているのは、海外からの電送があまりうまくいかなかったものと思われまふ。当時の電送写真では絵のようになっているのも珍しくはありませんが、このケースもそれと思われまふ。

14 「演説する吉田全権」『朝日新聞』昭和 26 (1951) 年 9 月 9 日付 (黒川特派員撮影 サンフランシスコ-東京間電送)



新聞紙面



原写真



15 (上) 「西園寺公興津へ」『東京朝日新聞』大正 14 年 11 月 22 日付夕刊 (西園寺公望と珍田捨己)
(下) < 憲政資料室収集文書 1477 >

16 (右) 「久方ぶりの入京 西園寺公」『東京朝日新聞』大正 13 (1924) 年 10 月 6 日付
(左) < 憲政資料室収集文書 1477 >

原写真

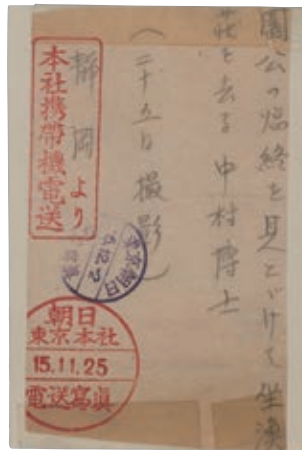
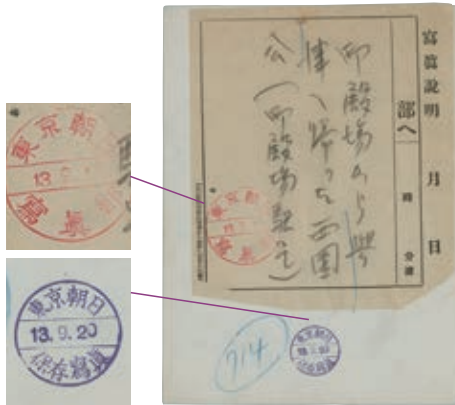


新聞紙面





17 東京朝日新聞の写真裏面
<憲政資料室収集文書 1477>



裏



表

通信社由来の写真の裏面



19 大阪電報通信社由来の写真の裏面。立ち姿は政治家・横田千之助<憲政資料室収集文書 1229>



18 同盟通信社由来の写真の裏面。右は無断転載厳禁といった注意書きがある<憲政資料室収集文書 1477>



裏面のスタンプを読む

新聞写真の来歴をうかがわせるのは、写真の表面より、むしろ裏面です。

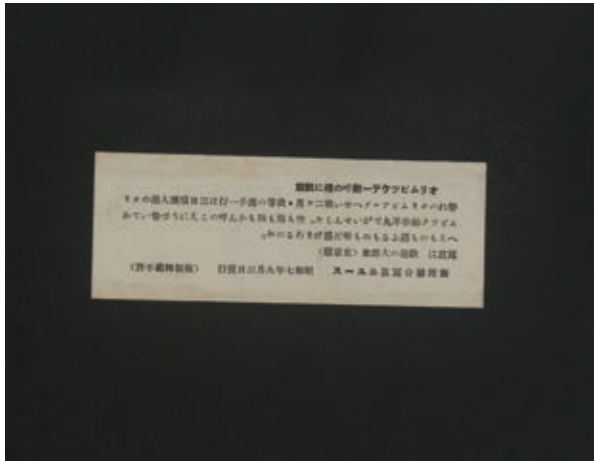
画像17を見ると、「東京朝日写真部」や「東京朝日保存写真」のスタンプをはじめ、さまざまなスタンプがあります。

写真部には写真記者が属し、写真部のスタンプの日付は撮影日であることが多いようです。その後に、取捨選択の上で保存すると決めた際に押しされるのが、保存写真や索引係、調査部のスタンプです。「714」や「4,095」といった番号は、新聞社で後年の保存のために決めている人物特定のための番号です。

このようにスタンプや裏書きの種類は多種多様で、日付印があってもそれが撮影日ではないことも多いことに、十分な注意が必要です。撮影から保存までに、かなりの間隔があったり、撮影日のスタンプがなかったりすることも多いのです。¹⁸⁾

通信社の写真

通信社のスタンプにも、様々なものがあります(画像18、19、20)。また通信社は、写真を販売する際キャプションとともに複数の相手先に売るため、謄写版で印刷



20 「オリンピックデー歓喜の裡に凱旋」『新聞聯合写真ニュース』昭和7（1932）年9月3日〈請求記号 Z72-C701〉



21 占領期に検閲をパスした際に押された写真裏面の民間検閲局（CCD）のスタンプ
『サン写真新聞』検閲ゲラ 昭和22（1947）年9月21日
（原所蔵機関：メリーランド大学ゴードン W. プランゲ文庫
プランゲ文庫請求記号：47-loc-0898H, P）
国立国会図書館デジタルコレクション URL
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9862175>
新聞と検閲には根深い歴史があり、戦前にも、新聞にかかわる検閲の一環として多くの写真が掲載不許可とされた

新聞が生んだアイドル 忠犬ハチ公



渋谷駅前の銅像で知られるハチ公は、駅の近所（松濤）に住む上野英三郎（東京帝国大学農学部教授）の飼い犬でした。上野は大正14（1925）年5月21日に脳溢血で急死しましたが、その上野を迎えに10年あまり渋谷駅に通ったというエピソードにより有名です。ハチは当初有名な犬ではなかったのですが、そのエピソードが新聞投書に載り、ストーリーが共有されたことで“忠犬”として知られるようになり、存命中に銅像までもが建立されました。ハチ公の初代の銅像は金属供出により短期間でこわされましたが、戦後に再建され、ハチ公やその銅像の写真はたびたび撮られ、渋谷駅の様子の変化を知らせてくれます。

22 「忠犬ハチ公の葬儀」『東京日日新聞』昭和10（1935）年3月13日付

23 「「恩を忘れるな」の主 忠犬ハチ公の死 骸へ注がれる涙」『読売新聞』昭和10（1935）年3月9日付夕刊

広がる新聞写真の世界
新聞写真のデータベースは日々進歩しており、その過程で、タイトルの充実化や年代推定が進んでいます。こうした
された説明書きが貼り付いている場合、
新聞社ではなく、通信社の撮影写真であることが推測されます。

鳩山首班かくて誕生



24 新聞記者の使うカメラには、持ち運びやすさなども加味され、流行がある。戦前は、アンゴ、パルモスが広く使われた。終戦後から昭和30年代ごろまではスピードグラフィック（通称スピグラ）が最も使われた。この鳩山首相の誕生時点での記者のカメラはスピグラばかりが見える

鳩山一郎の首班指名を決定した後乾杯する民主党代議士会「鳩山首班かくて誕生」『毎日新聞』昭和29（1954）年12月10日付

- 1 『日本新聞百年史』日本新聞百年史刊行会 編・刊 1960 p.544<請求記号 070.21-N6882>
- 2 この亜鉛凸版の解説については『印刷都市東京と近代日本』凸版印刷印刷博物館 2012 pp.170-173<請求記号 UE82-J11>
- 3 鎌田弥寿治『写真製版技術小史』共立出版 1971 p.101<請求記号 PE61-8>
- 4 羽鳥知之 編著『新聞の歴史 写真・絵画集成 1（新聞の誕生）』日本図書センター 1997 p.78<請求記号 UC126-G10>
- 5 井上祐子『日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち』吉川弘文館 2012<請求記号 UC89-J12>
- 6 読売新聞100年史編集委員会 編『読売新聞百年史』読売新聞社 1976 p.283, pp.467-468, p.522<請求記号 UC171-33>
- 7 川田佐門次「写真製版今昔物語」島屋政一 編『近世印刷文化史考』大阪出版社 1938 pp.142-144<請求記号 758-106>
- 8 谷口徳次郎「表彰式に於ける感想」『勤続者表彰式記録』朝日新聞社 編・刊 1933 pp.63-65 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1025537>; 谷口徳次郎「新聞写真の歴史」『アサヒカメラ叢書 第7』東京朝日新聞社 1934 pp.21-30<請求記号 647-45>
- 9 同上、谷口徳次郎「表彰式に於ける感想」pp.63-65
- 10 谷口徳次郎「新聞写真に就いて」『総合ジャーナリズム講座 第4巻』内外社 [編]・刊 1931 pp.217-234<請求記号 特276-28>
- 11 報道写真の歴史も含めて通信社の写真撮影に関する貴重な証言も収録した文献として『証言通信社史』がある。『証言通信社史』編集委員会 編 新聞通信調査会 2021<請求記号 UC85-M1>
- 12 伴俊彦『新聞の写真』同文館 1955<請求記号 747-B58s>; 小野秀雄『日本新聞史』良書普及会 1955<請求記号 070.21-0695n>
- 13 前掲「新聞写真の歴史」『アサヒカメラ叢書 第7』p.48
- 14 兼子昭一郎「戦後新聞写真史-4-スピグラと鳩」『新聞研究』388 1983.11 pp.48-57<請求記号 Z21-88>
- 15 北尾鎌之助「写真部の組織と活動」『総合ジャーナリズム講座 第1巻』内外社 編・刊 1930 p.21<請求記号 070.8-So626-N>
- 16 小樽新聞記者の旧蔵写真を事例に新聞社の旧蔵写真と紙面と見比べた貴重な成果として、三浦泰之「昭和戦前期の新聞写真 小樽新聞記者藤井伝一郎旧蔵写真群について」『北海道開拓記念館研究紀要』41 2013 pp.169-238<請求記号 Z8-854>
- 17 通信社による別の写真帖には『吉田内閣と講和記念写真帖』聯合写真通信社 1952<請求記号 312.8-R18y>
- 18 スタンプや裏面について朝日新聞社各位のご教示を頂きました。ここに記して感謝します。
- 19 海外の動きとしては、1789年から1963年までの新聞に掲載されている写真を検索できる Newspaper Navigator (Library of Congress : 米国議会図書館) も登場しており、新聞写真に着目したプロジェクトとして注目される。<https://news-navigator.labs.loc.gov/search>
- 20 新聞社における写真データベース構築の過程を論じたものに、長倉正知「国民の「文化財」を未来へ 毎日フォトバンクの取り組みから」『新聞研究』681 2008.4 pp.26-29<請求記号 Z21-88>; 吉田耕一郎「デジタル時代の映像（写真・動画）アーカイブ 朝日新聞フォトアーカイブ」『情報管理』59(2) 2016.5 pp.113-122<請求記号 Z14-375>; 大久保資宏「歴史を宿す「一枚」を未来に デジタル化と地方紙連携進む毎日フォトバンク」『新聞研究』836 2021.7 pp.50-53<請求記号 Z21-88>
- 21 戦前の朝日新聞社の旧蔵写真のコレクション（いわゆる「富士倉庫写真」）を対象に、その内容や来歴を詳細に分析した成果として、朝日新聞社「写真が語る戦争」取材班『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争』朝日新聞出版 2009<請求記号 GB521-J57>

※新聞は、夕刊のものに夕刊と記し、朝刊である場合記載を略。

データベースの収録範囲には紙面のない写真や新聞社の刊行するグラフ雑誌、地方新聞社の写真の一部なども含まれており、新聞写真の範囲と可能性は広がっています。⁽³⁰⁾

新聞写真は、それぞれの新聞社における現用の資料でもあり、各社で事情の違いもあると思われます。そのため、筆者も含めた部外者にとっては想像しがたい点もありますが、たとえそうだとにしても、新聞写真の文脈をより一層考えていかなくてはいけないと思わされます。当時の技術的な制約、新聞社・通信社の歴史、新聞社における写真資料の収集、写真の検閲など、新聞写真をめぐる状況には、時代時代によってさまざまな背景があるからです。⁽³¹⁾

技術革新により、フィルムカメラは実用から遠ざかり、新聞写真の撮影、修整、運搬などにかかるプロセスは、様変わりしています。しかし、一葉の写真がさまざまな過程を経て紙面にたどり着いていくことに変わりはなく、写真がたどってきた事情を想像することは、難しいながらも面白い課題です。

本屋に

ない

本



東北方言オノマトペ（擬音語・擬態語）用例集

青森県・岩手県・宮城県・福島県
竹田晃子 作成 人間文化研究機構国立
国語研究所 2012.3 202p ; 19cm
<請求記号 KF123-J46>

「階段のぼってつとはかほかかってやー」という言葉を、標準語に変換したつもりで、「階段を上っているとはかほかするんですね」と言ったことがある。「息切れする」と言うべきだったか！と気が付いても、後の祭りである。

このように、出身地の方言を方言と認識していなかったために、会話が途切れたり、聞き返されたりして、驚いた経験を持つ方は多いだろう。特にオノマトペ（擬音語・擬態語）は、響きの面白さからか、それまでの会話そっちのけで盛り上がりを見せることさえある。

『東北方言オノマトペ（擬音語・擬態語）用例集』は、東北地方太平洋側

を対象とした用例集だ。2つの試作版を経て、2012年3月に最終版が刊行された。体調や気分に関する単語を中心に掲載されており、例文によって実際の用例も確認できる。また、例文にはオノマトペ以外の方言も含まれるので、読み込むほどに新しい東北方言に出会える。

2011年、東日本大震災が発生し、各地から被災地へ多くの医療支援者がやってきた。序文を寄せる岩手県立大船渡病院院長・八島氏（当時）によれば、当時の現場においては「患者の言葉がわからない」という声が相当数上がっていた。特に身体感覚や気分の表現はオノマトペが使われることが多い。本書は、その声にこたえて作成された。

試作版は、東北の医療関係者や被災者支援施設、一部の公立図書館等へ配布されたようだ。また、東北地方太平洋側各県の図書館における本書（試作版含む）の所蔵状況を見ると、沿岸部を中心に、広く所蔵されていることが分かる。

コミュニケーションの不全は、往々にして、双方へ少なからぬストレスをもたらす。対話が必要不可欠である医療の現場において、方言が多用される困難は想像に難くない。一方、患者である被災者のなかには、一般に方言とされる言語こそが「標準」であり、心身の状態を表現する基盤である、という方もいるだろう。その上、言葉はアイデンティティの問題にも深く関わ

る。震災後、医療を受けた被災者にとって、その言語は「奪われずに済んだもの」の一つであったかもしれない。双方の橋渡しを目指し本書の作成に携わった方々、また支援にあたった医療関係者の方々には、頭が下がる思いがする。

さて、冒頭の「はかほか」は、本書にも掲載されている語で、筆者の出身地でもよく使われる表現の一つだ。地元を懐かしむ気持ちと共に、ついて回る不安を改めて自覚する。地元を離れて久しく、方言で話す機会は今やほとんどない。私は今、取り返しつかない「おらほ（私たち）の言葉」の喪失に加担しているのではないか？

（伊藤響）

※本書は国立国語研究所ホームページでPDFが閲覧可能です。

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

国立国会図書館で働いています

Season2

no.8

ウェブの結びつきが高度になり、最新のデジタル技術が、資料やサービスを思いやりに提供できるようになります。



システム基盤課業務システム運用係長として、どんなお仕事をされていますか。

主に来館利用者や職員が使用するシステムの運用保守をしています。例えば、収集書誌部門の職員が使う収集整理システムとか、利用者の方に書庫の資料を出納して貸し付けをしたりする利用者サービスシステムとか。

昨年末に利用者用端末の交換を担当されたそうですが、それも、そのシステムの関係なんですか？

そうです。来館利用者の入退館管理やプリントアウトの受理処理を行うシステム全体のリプレースを行ったので、その一環です。端末やプリンターとシステムが一体化しているのでも、それらもリプレースしました。端末自体が、4、5年経つと壊れやすくなるので換えなきゃいけないのと、システムを動かすためのベースであるソフトウェアもだんだんバージョンアップされていくので、手を

加えなければいけないんです。ユーザビリティの関係で、これを機に直しましょう、とシステム改修もします。

それは業者に委託して？

大前提として、運用とか開発といってもシステムは自分で作ってないです。開発作業から丸ごと委託する形で調達をしています。その案件がうまくいくようにプロジェクト管理をするというのが、一番の仕事です。

なるほど。施設整備と同じですね。

受託業者さんに「当館にとってこのあたりが特に大事なんです」というところをきちんと伝える。要件だったり、サービスが止まっちゃいけない日だったり。職員側だと、あしたい、こうしたいって思っちゃうところを、予算や仕様の範囲を超えないようにコントロールする。

とはいえ、やっぱりIT技術に詳しくないとできないのでは。

そうでもないんですよ。もちろん最近の技術動向に詳しいほうが、館のシステムの将来の見通しは立てやすいですし、プログラミングも自分でできたりすればいいと思うんですけど、残念ながら僕はどっちもできません。

そうなんですか！

ただ、業者さんも聞けば何でも教えてください、プログラムの言語を

池田 大希 電子情報部 システム基盤課 業務システム運用係長

平成25(2013)年4月 電子情報部 システム基盤課 運用調整係
平成25(2013)年7月 電子情報部 システム基盤課 システム基盤構築係
平成27(2015)年10月 調査及び立法考査局 外交防衛課
平成30(2018)年4月 利用者サービス部 サービス企画課 情報サービス企画係
令和2(2020)年4月 利用者サービス部 サービス企画課 情報サービス企画係長
令和3(2021)年4月 電子情報部 システム基盤課 業務システム運用係長

※令和4年2月3日インタビュー実施

む力が高いエース級の職員もいる。教えてもらいながら業務を遂行します。

それは心強い。一方で、端末リプレースの様子を見ると、やや肉体労働に近いような部分もありそうです。

そうなんです。端末がいっぱい来て、それらの設定作業を行う場所としてこのくらいの広さの空間が必要なので、あの部屋を貸してください、とか。「上手に引越すスキル」ですね(笑)。

係長として、係担当のシステム全部を把握しているんですか？

薄く広くです。もちろん、個別にちょっと大きな課題、今回のリプレースだったりとかは詳しく把握しています。担当職員同士の調整で困難なときなどは、対応を判断させてもらうこともあります。どちらかというと全体の負担が軽くなる方を選択することが多いです。直近であったのは、Aというシステムが、Bというシステムにデータを送っているんですけど、その一部がおかしいということが最近分かったんです。悪

いのはAだったんですけど、Bの方が簡単に直せそうだったので、Bの方に直させるとか。

合理的ですね。失敗談とか苦労話はないですか？

印象深いということでは、入退館ゲートの交換ですね。東京本館ですと昨年12月中旬に本館または新館のゲートを交換、今年1月にもう一方のゲートを交換する、ということが、僕が異動してくる前から決まっていた。ただ、その時はコロナで入館制限をしていて、本館ゲートしか使っていなかったんです。本館ゲートを交換している間、代わりに新館ゲートを開けるとなると、普段使っていないので準備が大変すぎる。だから開館中はやめたほうがいい。でももともと徹夜作業とかを組んでるわけでもない。それでいろいろと調整があつて、最終的には臨時休館日を設けることになったんです。

もしコロナじゃなかったら問題なかったわけですね。

はい。臨時休館は利用者の方にとって不利益なので、間接的にコロナの

せいとはいえ難しい判断だったと思います。

入館したときもシステム基盤課配属でした。

今と同じようなことをしていました。基幹ネットワークのリプレースを担当していました。僕はメールとかファイルサーバ、館内イントラを主に担当していましたが、この時も引越す計画を立てたり、進捗を管理したりする役割も担いました。

館内イントラはリプレースのたびに便利になる印象がありますが、自分なりの創意工夫が実現できたとかはありましたか？

これもまた、僕が来た時にはだいぶ要件は決まっていたので。僕はシステムを自分で構想をして実現していくということはしていなくて、すでに決まっている仕様で「どうやってこれを実現するんだろう」ということが多いですね(笑)。

僕はシステムに関してもいえば、どちらかというと、同じものを長く使えばそれでいいと思っているんです。改善しても劇的な効果が見られ

ないんだったら、変える方がコストが大きいのが実態だと思っているので。費用面も職員の負担も。

おお、エコですね。

もちろん、今、個人送信用に利用者サービスシステムを改修しているんですけど、そういうのは積極的にやっていくべきだと思いますね。制度も変わりますし、利用者の方にとっても期待値が高い。でも、そうでもないこともあるように思います。一方で、ソフトウェアやハードウェアをバージョンアップしていかないと提供元のサポートが受けられなくなるという事情もあるので難しいですが。

◆ ◆ ◆
調査及び立法審査局外交防衛課では
どんなお仕事をされていましたが。



利用者用端末等のリプレース作業の様子



館内でもオンラインで打ち合わせ

大学では経済学を専攻されていたんですよね？

すごく戸惑いました。最初は外交を、そのあと安全保障を担当しました。個人の論文としては1本書いただけです。ただ、専攻とは異なる分野でも、課長や先輩の指導で、依頼調査に的確に回答できる。当館が質の高いレファレンスを提供できているんだなということをもっと知ることができました。それになんとか追いつくのに必死でした(笑)。

そのあと、利用者サービス部サービス企画課情報サービス企画係ではどんなお仕事をされていましたか。利用者向けシステムの担当ですね。

電子情報部がシステムの業者さん寄りの部分と、サービス部門との間に立っているとすると、サービス企画課はサービス部門全体のとりまとめです。あと、利用者サービスの基本計画を取りまとめるのも、この係の仕事です。

利用者向けシステムの中では、電子ジャーナルも担当していました。電子ジャーナルの契約は収集企画係が担当²⁾してくれています。新聞記事などいろいろなコンテンツがあります。が、全文を収録しているジャーナル、雑誌など論文単位で記事があるものは、求める論文がどのパッケージに入っているか探るのが大変なんです。その辺をわかりやすく検索するための仕組みを運用しています。

雑誌名で検索できて便利です。

ほかにも心に残っているのは、利用動向調査ですね。平成30年1月に新しいシステムになってからデータがいろいろ取れるようになったんです。それを分析してレポートにまとめたりして。例えば、館内閲覧の人気アイテムランキング。館内複写や遠隔複写のランキング、国会国会図

書館オンラインでのタイトルや著者名などの検索項目の使用頻度、電子ジャーナルも結局どれが人気なのか、とか。

国立国会図書館の100年史編さんの時は詳細な分析ができそうですね。

来館サービスの抽選予約制のために抽選の仕組みも作りました。ホームページのウェブフォームからデータを持ってきて、乱数で当選者を決定します。コロナ対応についても、利用動向分析の一環でいろいろなレポートを館内の会議に提出しました。

抽選の上限数などの検討材料になっているわけですね。経済学を学んでこられて、本領発揮という感じですか。

経済学部にいると、いろいろな計量的なデータを扱うことも多かったんです。もともと馴染み深い分野だったのかな。利用動向調査では統計的手法を用いたテクニカルな分析をしているわけではないんですが、見せ方とか、データをどういう単位でまと

めるとよいかという考え方は培われていたかもしれません。

大学院では修士論文で研究科長賞をいただきました。数理モデルを考えた論理的に検討を進めていくという修士論文の作成作業は、思考の訓練として役に立ったのかなとは思いますが。経営コンサルタントとしての仕事としても、今やっている仕事としても。

大学院修了後、経営コンサルタント会社に就職されて、それをなぜやめようと思ったんですか。

5年くらいいましたが、やっぱりどうしても忙しかったので。自分の時間がほしいな、スピードを落とさず働きたいなっていうのをずっと思っていて。案件によりますが、だいたいは終電くらいまでは働いていました。

毎日ですか!?

忙しいときにはタクシードルで帰ることも週に2、3回はあったんじゃないかな。日中は自分のオフィスで考えるというのにはあまりなくて、いろいろクライアントの話聞いて、クラ

(2) 本誌2022年1月号参照

イアントが夕方くらいになって落ち着き始めた頃に、翌日のための資料を作ったりとかそういう動きが多かったです。

もともと図書館はよく行っていたので、図書館で働けるといいのかしらん、あ、国立国会図書館があるじゃん！と(笑)。

◆ ◆
スポーツがお好きだとか。今取り組まれているものなどありましたら。

ジョギングをやっています。子どもが生まれる前は毎朝5km走ったり、フルマラソンの大会にも参加したりしてました。今は子どもが5歳と2歳なので、なかなか走れなくなっています。コロナもあって大会自体も少ないです。少しでも走ろうと思って、なんとか週に1、2回くらいですかね。だいたい8kmくらい。

8 km!
うまく妻が子どもを見てくれるタイミングであれば、秩父の方に行つて低山の縦走をしたりとか。縦走つていうのは、いくつか低い山を、いちいち下山しないでまとめて登ること

です。あと片道だけですけど多摩湖にジョギングに行つてみたい。

多摩湖まで走るんですか？ そこまで電車で行つて、そこを走るじゃなくって？

多摩湖まで走つて行つて、多摩湖について、やった！で、電車で帰る(笑)。それが30kmくらい。

……！
そういうことをすると気持ちがいセツつるので。頑張れるような気がしてきます。

今後、国立国会図書館はどうあるべき、またどうなつていったらよいと思えますか。

資料を確実に収集して大切に保存していくという、この事業は継続できたらいいなつて思います。ただ出版点数は減っているし、たぶん、みんなが調べものしようとか、何か情報を得ようというところでの紙の資料のプレゼンスは下がっている。そうすると国内で出版された本を集めているというイメージを抱かれやすい国立国会図書館の価値も一緒に落

ちちゃうと思うんですよね。それに抗うことができるといいなつて思います。

図書館資料があくまでもベースにあるんだけど、インターネットにある有用な情報もうまく使いながら、レファレンスサービスをする。たとえば、各国の軍事費の比較なら、定評があるシンクタンクはいくつかあって、レファレンスブックや分析レポートなんかを出していてウェブサイトに最新の情報がある。そういうものとはともレファレンスで有

用ですし、それがさらに校正されたりしたものが紙で出版されていくわけですから。

最前線で有用な情報はウェブにあるというのが今の実態だと思うので、図書館資料とそのあたりを意識的に結びつけながら、ガイドできるというのかなと思います。ただいたずらに情報発信をしていけばいいというわけではなくて、よりレベルの高いレファレンスができるような、そういうサービスができるいいなと思います。



(左) 埼玉の彩湖マラソン、(右) 石垣島マラソン

調査及び立法考査局が令和3年度に行った調査プロジェクトの成果として、報告書を刊行しました

【総合調査】

『変化する国際環境と総合安全保障』（調査資料2021・3）

我が国を取り巻く国際環境は、大きく変容しています。グローバル化が進み、経済的相互依存が深まる一方で、国家間の競争や対立が顕在化し、軍事的な脅威だけでなく、非軍事的な脅威も一国の経済・社会に大きな影響を及ぼすようになっていきます。今回の総合調査では、このような脅威の多様化に対応した安全保障の在り方を「総合安全保障」と呼び、安全保障概念、スイス連邦憲法における安全、サプライチェーン、通貨間競争、公共事業の事業評価、セキュリティ・クリアランス、技術流出防止、中国の国家安全、議会による情報機関監視の9つのテーマについて調査・分析を行いました。

【科学技術に関する調査プロジェクト】

『ゲノム編集技術―最前線で生じつつある課題と展望』（調査資料2021・4）

本報告書は、令和3年9月24日にオンライン開催したシンポジウム「ゲノム編集技術―最前線で生じつつある課題と展望―」の記録集です。近年、応用や社会導入が進みつつあるゲノム編集技術を題材とし、技術、バイオエコノミー、知的財産権、倫理等の様々な観点から議論することを通じて、ゲノム編集技術の社会実装をめぐる課題を多面的に明らかにすることを目指しました。立川雅司氏、江面浩氏、山本一彦氏、橋本一憲氏、三成寿作氏、藤木篤氏による報告、中村崇裕氏によるコメントに加えて、パネルディスカッションの記録及び立川雅司氏による解説を掲載しています。

『脱炭素社会の技術と諸課題』（調査資料2021・5）

人類の活動に由来する地球温暖化の影響を緩和するため、21世紀半ばまでには二酸化炭素の排出を正味ゼロとし（カーボンニュートラル）、世界の平均気温の上昇を1.5℃未満に抑えることが必要とされています。カーボンニュートラルを目指すに当たっては、脱炭素化の科学技術とそれを支える法律・制度・政策が鍵となります。本報告書では、社会の脱炭素化に向けた技術の概要と評価、研究開発の動向と関連施策、技術を社会実装するための諸課題等について、研究の最前線におられる学識経験者の方々にも参画いただきながら、分析・整理を試みました。

『量子情報技術』（調査資料2021・6）

量子情報技術は、量子力学と情報科学の融合分野である量子情報科学に立脚した「量子2.0」とも呼ばれるエマージングな技術領域です。今後、数百年にわたって人類が手にする科学技術の根幹を量子情報技術が担い、様々な社会課題の解決に貢献していくことが期待されています。本報告書では、量子情報技術の基本的な性質及び歴史的経緯を整理するとともに、その中核技術（量子コンピュータ、量子シミュレーション等）について解説します。さらに、関連企業の動向、量子人材育成、資格や特許出願、世界各国の研究開発戦略・政策など、様々な観点から量子情報技術の現状と課題について分析しています。

これらの報告書を含め、国立国会図書館が国政審議の参考資料として作成した刊行物は、ホームページで全文をご覧いただけます。是非、ご活用ください。

○国立国会図書館ホームページ▽国会関連情報▽『調査資料』2022年刊行分
<https://www.ndl.go.jp/diet/publication/document/2022/index.html>

新刊案内

レファレンス 855号

民事訴訟手続のIT化の動向と課題
 軍事行動と議会の役割―米国における9・11後の武力行使承認決議（AUMF）をめぐる論争―
 国際法の観点から見た人権と制裁をめぐる議論―国連総会での一方的強制措置等に関する議論を中心に―
 欧米10か国の歴代政権及び政権政党（資料）



A4 114頁 月刊 1,100円 (税込)
 発売 日本図書館協会

NDL Topics

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第291号

欧州気候法―気候中立（温室効果ガス排出量実質ゼロ）目標の法定化―
スウェーデンにおける生理用品の無償提供に関する法律
フランスの生命倫理に関する法律の改正



A4 104頁 季刊 1,980円(税込)
ISBN 978-4-87582-891-4
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 351号

論文公開手段としてのオープンアクセスジャーナルの有効性
文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」結果の経年変化と課題
〈動向レビュー〉

くずし字資料の解読を支援するデジタル技術
“Controlled Digital Lending”を巡る動向・CDLに羽化した図書館サービス理念と米国出版界の主張
文化機関における3次元計測・記録データの管理・公開の意義と課題



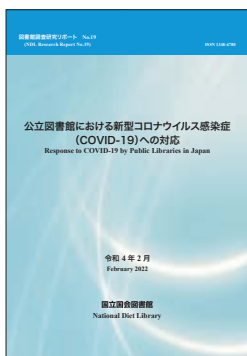
A4 24頁 季刊 440円(税込)
発売 日本図書館協会

日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812

図書館調査研究リポートNo. 19 『公立図書館における新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応』を刊行しました

令和3年度に、公益社団法人日本図書館協会の協力を得て実施した「図書館及び図書館情報学に関する調査研究」の成果をまとめ、令和4年2月に標記の報告書を刊行しました。ホームページで全文をご覧になります。

この調査研究では、令和3年6月から7月にかけて、国内の全公立図書館を対象としたオンラインのアンケート調査を行いました。調査項目は新型コロナウイルス感染症への対応状況（閉館、感染拡大防止策、非来館型サービスの提供等）であり、2,075館から回答を得ました。
報告書には、回答の分析に加え、ご回答頂いた図書館のうち3館を対象としたインタビュー調査の成果等も収録しています。



<https://current.ndl.go.jp/report/no19>

問合せ先
国立国会図書館 関西館 図書館協力課
調査情報係
電子メール chojo@ndl.go.jp

第36回納本制度審議会

2月28日、第36回納本制度審議会が開催され、審議会委員11名が出席しました。

審議会では、代償金部会の審議経過について奥邸弘司部会長から報告されました。また、事務局から、有償等オンライン資料の制度収集開始に向けた進捗等について報告を行い、質疑応答がありました。

納本制度審議会委員

(五十音順 敬称略) (令和3年9月2日現在)

会長 齋藤 誠 東京大学大学院法学政治学専攻科教授
会長代理 植村 八潮 専修大学文学部教授
委員 伊藤 真 弁護士
江上 節子 武蔵大学名誉教授
江草 貞治 株式会社有斐閣代表取締役社長
奥邸 弘司 慶應義塾大学大学院法学研究科教授
小野寺 優 一般社団法人日本書籍出版協会理事長
柴野 京子 上智大学文学部新聞学科准教授
仲俣 暁生 公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長

根本 彰 東京大学名誉教授
平林 彰 一般社団法人日本出版次協会会長
堀内 丸恵 一般社団法人日本雑誌協会理事長
丸山 昌宏 一般社団法人日本新聞協会会長
村松 俊亮 一般社団法人日本レコード協会会長

○代償金部会所属委員

奥邸弘司(部会長)、江上節子(部会長代理)、伊藤真、小野寺優、根本彰、堀内丸恵、村松俊亮

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホームページの収集・納本制度・納本制度審議会
<https://www.ndl.go.jp/collect/deposit/council/index.html>

NDL Topics

おもな人事

△退職▽

令和4年3月31日付け

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任

千原 正敬

専門調査員 調査及び立法考査局国土交通調査室主任

山下 修弘

専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任

石渡 裕子

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任

中渡 明弘

専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室主任

泉 眞樹子

司書監 総務部付 大鳥 薫

△異動▽ ※ () 内は前職

令和4年4月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局経済産業調査室主任)

小池 拓自

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任

(専門調査員 調査及び立法考査局政治議会調査室主任)

塩田 智明

専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任 (国際子ども図書館長)

堀 純子

専門調査員 調査及び立法考査局憲法調査室主任、政治議会調査室主任兼務 (専門調査員 調査及び立法考査局憲法調査室主任)

小林 公夫

専門調査員 調査及び立法考査局農林環境調査室主任

(専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付) 樋口 修

専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局農林環境調査室主任)

森田 倫子

専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任)

ローラー ミカ

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付 (収集書誌部副部長)

秋山 勉

専門調査員 調査及び立法考査局経済産業調査室主任 (調査及び立法考査局次長、外交防衛課長事務取扱)

奥山 裕之

専門調査員 調査及び立法考査局社会労働調査室付 (総務部副部長、管理課長事務取扱)

福井 祥人

総務部副部長 (総務部副部長、収集書誌部副部長)

山地 康志

収集書誌部副部長 (関西館長)

木藤 淳子

関西館長 (利用者サービス部副部長、サービス企画課長事務取扱)

伊藤 克尚

国際子ども図書館長 (司書監 総務部付、国際子ども図書館企画協力課長兼務)

三浦 良文

主幹 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室付、議会官庁資料課長事務取扱 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付)

塚田 洋

司書監 収集書誌部付、外国資料課長兼務 (司書監 収集書誌部付)

川鍋 道子

収集書誌部副部長 (電子情報部副部長)

藤本 和彦

総務部副部長、企画課長事務取扱 (総務部企画課長)

上保 佳穂

調査及び立法考査局次長、調査企画課長事務取扱 (調査及び立法考査局調査企画課長)

小澤 隆

司書監 収集書誌部付、収集・書誌調整課長兼務 (収集書誌部収集・書誌調整課長)

諏訪 康子

集書誌部収集・書誌調整課長

司書監 利用者サービス部付、サービス運営課長兼務 (利用者サービス部サービス運営課長)

林 直樹

司書監 利用者サービス部付、図書館資料整備課長兼務 (利用者サービス部図書館資料整備課長)

小林 裕之

電子情報部副部長 (電子情報部電子情報企画課長)

木目沢 司

令和4年4月2日付け

専門調査員 調査及び立法考査局国土交通調査室主任

内田 竜雄



28 関西館 鋸屋根と夕暮れ
photo by Mizuho

5

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2022.5

NO.733

MAY
2022

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Tales of mystery and imagination—Fantastic illustrations by Harry Clarke
- 06 Revealing the digitization project of materials at the NDL
- 17 Browsing library materials—deciphering photographs (4)
History and background of newspaper photography
- 32 Working at the NDL, Season 2 Episode 8
- 16 <Tidbits of information on NDL>
Preparing for the journey to digitization
- 31 <Books not commercially available>
Tohoku hogen onomatope (Giongo · gitaigo) Yoreishu
- 36 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和4年5月号 (No.733)

令和4年5月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 松浦 茂

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 2 . 5

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士